

ジャーナリストの視点から 手と手をつないで

No.335

にしのおのりおみ
西尾 紀臣

(福岡県・福岡市人権・同和問題研修の講師団講師)
(元毎日新聞社記者)



宇宙時代の私たちの発想

今の季節、オリオン座や冬の大三角形が凜とした夜空を彩っている。見上げると気宇壮大、次々夢がふくらんでくる。

天体に興味を持ったのは30年前、ハレー彗星が76年振りに出現し、一大天体ショーが繰り広げられた時からだった。観測条件のよいところを探して各地を飛び回り、宇宙と名のつく本を読みあさった。立花隆の『宇宙からの帰還』も、その1つだ。米宇宙飛行士たちが様々にその体験を語っていて時を忘れた。

こんなふうだ。一回り90分の猛スピードで眼前の地球が回転している。人為的な国境線などない。なのに百余の国々が分立し、領土やイデオロギーを巡って流血を繰り返している。ある飛行士は「信じられないほどばかなことだ」と、笑い出したくなった。

地球の後方には不気味な漆黒の闇がはてしなく広がっている。闇の中にボツンと浮かぶ青色に輝く球体が宇宙船地球号だ。種族、民族は違うかも知れ

ない。が、宇宙から見ると、表面的な違いは消し飛び同じものに見える。地球のかけがえのなさ、共に乗り合わせる奇跡を実感して「みんな同じホモ・サピエンスなのだ」、人類への愛おしさを口にした飛行士もいた。

星博士、宮本正太郎さんの『太陽系の宇宙』も忘れがたい。光で千年かかる遠方に、人工的な電波の発信が疑われる星がいくつもある。でも、発信した電波が届くのに千年、先方がそれに気づいて返信するのに千年。併せて2千年の子々孫々伝えて対話、それが宇宙だとして、宮本さんは「人類は国が違い、皮膚の色が異なるからと言って差別し、排除し合っているのか。私たちは助け合わなければならないのではないか」と結んでいる。

ハレーショー以降、宇宙をめぐる動きは一段と加速した。まずは、日本人宇宙飛行士の登場である。国際宇宙ステーションに5カ月半滞在した古川聡さんが「最初は、あそこが日本」口シアだ」と、母国の話をしていたのが、次第になくなった。地球が故郷だ、と思うようになった」と、意識の変化

を語っていたのに注目した。

日本の月探査機「かぐや」が、ハイビジョンカメラで月の地平に沈む地球の画像を捕らえ、「はやぶさ」は世界で初めて小惑星のかけらを持ち帰った。最近では、NASA無人探査機が初めて冥王星の素顔を捕らえている。宇宙を巡る動きは一段と加速され、本格的な宇宙時代に入るだろう。

連続テロ犯人が世界中で跋扈し、自分の信ずる「正しさ」への狂信と、他人の信ずる「正しさ」への不寛容が世界を覆っている。しかし、異なる価値観を認め合い、人と人がつながり、共存する先にしか私たちの未来はない。その思いを実感し合うのが宇宙時代だ。



平成26年度『第48集人権作品集』から
当時、国分小学校3年
まつしま
松嶋 珈杏さんの作品